

メンターを活用したBBSで、 学習者主体の学びを深める



細川英雄
大学院日本語教育研究科教授

教員が一方的に情報を与えるという今日の大学教育のあり方に疑問を持ち、「学習者主体」の学びを目指している細川教授。今回は、その教育観に基づく授業を、Course N@viのBBSを活用したフルオンデマンドで行っている事例を紹介する。

対話や議論を通して、 「自分のテーマ」を追求する

細川教授の考える「学習者主体」の授業とは、教員から知識を与えられるのではなく、学生自らがテーマを見つけて作り上げていくというものだ。このコンセプトで行われている授業の一つが、オープン科目の「書くこと・考えること」という日本語・日本語教育研究講座である。

参加する学生たちが自らテーマを見つけてレポートを書くというこの授業では、教員はあくまで活動の枠組みを伝えるのみという点が大きな特徴だ。学生たちは、他の学生との議論や対話を通して、自分自身でテーマを決め、それについての考えを深め、レポートを完成させる。

細川教授は、5年ほど前からこの授業を実験的にフルオンデマンドでも行っている。まず、活動の内容について教員が説明した15~20分程度の講義を、ビデオコンテンツとして7、8回分用意しておく。学生たちは、順次公開されるこの講義ビデオを各自で視聴した後、各回ごとに用意されたBBSに自分の考えを投稿していく。「1週間では考える期間が短すぎるので、あえて講義は隔週で配信しています。2週間の間にじっくり考えて書き込んでもらうためです。」

この流れの中で、学生たちは自分で決めたテーマに関するレポートを、順次改訂を重ねながら合計5回提出する。Course N@viのレポート機能を使って提出させるが、相互にレポートを読むことができるように他の学生からも公開する設定にしておき、その都度BBSでコメントをつけ合う。自分のレポートに寄せられたコメントやアドバイス、さらに他人のレポートに関する意見交換やそこから広がった議論を踏まえて、各自がさらなる考察を加えて徐々にレポートを仕上げていく。そして最後は学生同士で相互評価を行う。



【細川教授と授業運営を支援するメンターのお二人。左からメンター 福村真紀子さん(日本語教育研究科)、細川教授、メンター 鈴木蘭さん(日本語教育研究科)】

BBSの運営は、大学院生の メンターに任せる

この授業において重要な要素となっているのは、学生同士でのインターアクションだ。フルオンデマンドの授業ではそれをBBSで行うことになる。当初は細川教授自身もこのBBSに参加していたが、今はチェックするだけで、自身は一切書き込まないという方針を貫いている。「私が参加すると、学生は私の意見に沿わせようとする傾向があります。自分で自由に考えてほしいのに、私の中から正解を探し出そうとしてしまう。それでは学習者主体というこの授業のコンセプトに反するので、教員は参加しない方がよいという結論に至りました」。その結果、講義コンテンツ以外で教員自らが発信するのは、Course N@viの「お知らせ機能」を使った事務的な連絡のみとしている。

それを補う手段として採用しているのが、TAがメンターとしてBBSに参加するという手法だ。メンターとなる日本語教育研究科の大学院生には、「学習者主体とは何か」という理論を学んだ実績に加え、さらに教場で行っているこの授業の活動に半年参加した経験を持つ人に担当してもらっている。

違う人間から異なる視点が出てくる方が効果的という理由から、現在は2名のメンターが同時に参加している。「教員である私よりも、学生により近い立場のメンターからのアドバイスの方が、学生の中にはすんなり入っていくようです。」

メンターの役割は、常にBBSの流れをチェックしながら、議論の活性化を促していくことだ。単に「〇〇さんの書いた考えについて、どう思うか?」などと問いかけるだけでなく、書かれている内容にあえて批判的な投げかけをするのも有効だという。賛同するとそれで終わってしまうが、あえて批判的に書くことで、反論という形で議論を呼び起こすことができるというわけだ。さらに、メンター自身が感じた素朴な疑問を質問という形で尋ねてみると、書いた本人が自覚していなかった視点に気づきを与えたり、他の人から意見が寄せられたりして、議論が広がっていく効果があるという。

自分とテーマとの関連性を じっくり考えさせる

この授業は、文章を書くためのスキルを教えるものではない。それ以



隔週で講義動画を配信し、学生はその後2週間BBSに意見を書き込みつつ、レポートを段階的に仕上げていく。レポートの提出期限など事務的な連絡事項は「お知らせ」機能に載せておく。

Course N@viデビューへの一言!

Course N@vi上での活動は、すべてを機械的にデータ管理できるので、それを分析したり、成績に反映させたりすることが簡単にできる点はとても便利です。

前に重要でかつ困難なのは自分のテーマを見つけることだと、細川教授は考えている。

「初等教育では自己完結的に自分の思いを書くように指導されます。そこには、自分の問題を他者に語りかけるという視点がありません。ところが、大学の高等教育になると、一転して客観的に自分の外にある情報を集めてくることを求められます。その結果、何かのテーマを調べて書いたとしても、なぜ自分がそれを書くのかという振り返りがないままであるため、自分の生涯教育としての筋道が見えないのです。」

したがって、この授業において重視されるのは、選んだテーマと自分との関係性をじっくり考え、それを「自分の問題」として捉える視点を育むということだ。メンターはBBSでのやりとりの中で学生たちに刺激を与え、そうした意識を高めていくよう促していく。

また、学生たちの自由な語り合いは、単なる雑談に流れてしまう危険もある。自分とテーマとの関係性を見つめるというこの授業の趣旨から離れることのないように、話題を軌道修正していくのもメンターの役割となる。

参加度を機械的に数値化して成績に反映

この授業のもう一つ大きな特徴は、教員の主観による成績付けを行わないということだ。「レポートの価値観は何にフォーカスするかも変わってきます。私の意見を言うことはできるけれども、それを成績に反映させることには疑問を感じます。」

とはいえ、大学というシステムの中では成績を付けざるを得ない。そこでこの授業では、レポートの提出回数やBBSへの参加率などを成績に反映している。「状況によっては、学生同士でベスト10を選出し、その結果を考慮することもあります。いずれにしろ、すべての活動はCourse N@vi上で行っているため、これらを自動的に数値化できるのは、とても便利だと思います。」

インターアクションはオンラインでも十分可能

細川教授は、学生間のインターアクションをオンライン上で行うとどうなるかということに興味を持ち、この授業のフルオンデマンド化を始めた。その結果、フルオンデマンドでも、対面授業と同じようにインター

アクションを行えるという感想を抱いているようだ。

口頭の議論では、自分の考えをまとめないまま話してしまい、言いたいことがうまく伝わらないこともありがちだ。その点、文字化する段階で多少の内省が入る分、筋道の通った意見を書けるのは、BBSならではの特徴といえるだろう。

ただし総合的にどちらがよいかというのは一長一短だともいう。顔の見えない相手とはコミュニケーションがとりづらいと感じる学生もいれば、直接対話することが苦手なのでBBSの方が話しやすいという学生もいる。中には、文字だけのやりとりから相手がどんな人なのかと想像しながら議論を進めることが、逆に刺激的でおもしろいという意見もあった。

文字だけの交流でもコミュニティが生まれる

BBSでの議論が進むうちに、話し合いを引っ張っていく者、話題を提供する者、あるいはマナーの悪い者など、いろいろなキャラクターが見えてきて、社会の縮図のようなものができあがるというのも興味深い。「この活動を通して、社会というものをいかに意識させるかが重要だと考えているので、BBSの中でもこのようにしてコミュニティが出来上がっていくというのは大きな意味があると思います。」

一方で、フルオンデマンドで行うのが故の弱点もある。「Course N@viへの学生のアクセス頻度にはばらつきがあるので、周知したい内容に漏れが出てしまう危険がある点は注意が必要です。」

議論の広がり方、盛り上がり方については、どちらのやり方もケースバイケースだという。「現状は、フルオンデマンドは履修する学生の数が多いので、これを少人数限定にすれば、違う展開になるかもしれません。あるいは、スクーリングを取り入れるなど、対面とオンデマンドとを両方を組み合わせてみたりする方法もあるでしょう。」

現在細川教授が担当しているのは大学院での少人数演習が多いため、この授業以外でフルオンデマンドを導入しているものはない。「教員から発信するような講義が中心になる授業では、毎年内容を更新していく必要があるので、一度撮影したコンテンツをそのまま使うのには不向きです。しかし、この授業のように枠組みだけを設定して、あとは学生同士の話し合いで進めていくようなタイプの授業には、とても合理的なシステムなのではないでしょうか。」